

PHD LETTER

50

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1994・3

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価:100円

- 東西研修旅行レポート.....3P
- タイスタディツアーレポート.....4・5P



タイ・ムシキー村にて
撮影/ソディ上原眞理

草の根や木の実をもちよって染めものの集い
トントンとたたいたり 火をおこしたり
四方山話の中で 作業は進む
糸が染まったら どんな布を織ろうかしら...

草の根の人々を訪ねて

村人による「開発・発展」を応援

昨年8月末、大洋上セミナー兵庫93でオーストラリアのフリーマントルからペラウ共和国パラオまで船旅をしました。そのお陰で初めてパラオ、グアム、ポナペ、ナウル等のミクロネシア、メラネシアの人々を訪ねることができました。

全ての行程は、昨年から調査しているソロモン諸島迄の経由地であります。

第一の印象はミクロネシアの島々(実はそのほとんどが島嶼国家であります)が大きな距離を超えて共同しようとしていることでした。例えば、高等教育機関(短大レベルのカレッジで経済学などに加えてミクロネシアの伝統工芸を教える)をパラオに設置して大学教育を実施する。あるいはメラネシアのナウルでは、各島々の政府が相互に政治や経済の情報を交換し、共通の課題(例えば環境、核など)を解決しようとしていることなどでした。特にナウルで印象に残ったことは、何十年と掘り進んできた燐鉱石が底をつき、島(国)の未来に暗雲がたれこめていること。この利権を使って富を手にしたイギリスを相手に島の環境の復元を求めて、国際司法裁判所に提訴していること(日本も太平洋戦争中数年領有していた)。

島づたいにナウル航空を使ってようやく9月にソロモン・ガダルカナル島のヘンダーソン空港に着きました。二度目の訪問でした。

約一週間の滞在で昨年より親しくしているソロモン諸島開発機構(SIDT)のディレクター、アブラハムさんの故郷マライタ島アパロロ地区をベースに、アンナキナキなどひとつひとつの集落を訪問、調査しました。そこで大変関心を持

ったことはこの地のひとびとが注意深い観察によって、熱帯林の循環再生のサイクルを確認し、森の再生を実現しつつあるということでした。

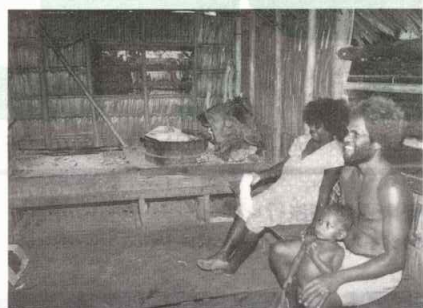
一方ソロモン諸島国では全国的に熱帯林の伐採が外国資本の手によって進められているようです。韓国、台湾、マレーシア、フィリピン、インドネシアなどの会社が木を切り、海に運ばれた丸太を日本が買っていくということでした。これらの企業に木の伐採権が移っていくのは、伝統的な集団所有の土地制度(カスマーランド)にあって、その中の何人かが全体の合意を無視して伐採権を個人レベルで売り渡すところに原因があるといわれているようです。

そこで外部の人による木の伐採を避けるために、土地の集団所有の伝統的約束を強化するための教育を、次の世代に展開しています。

私はこの素晴らしい集団の中からルーク・スイファシア君をソロモン最初の研修生に選びました。

今年から具体的な関係を持つことのできたマライタ島アンナキナキのひとびとが自分達の価値観に基づく「開発・発展」を応援するために、PHDはこれから数年かけて4~5名の村人を招くつもりです。

ソロモンからパプアニューギニアに飛び、村にかえったトニー、ヘルペ、レル、ラニーさんに会いました。今年はスケジュールの都合と、彼らの送り出し機関、ルーテル教会農村開発部ベノ君の周到な準備で第二の都ラエで全体のプロジェクト評価会という形で機会が設定されました。



ソロモン・マライタ島の平均的な所得層の人々の台所風景

トニー君とヘルペ君は、昨年と同様各自の持ち場でコツコツと移動採取農業に生きる人々に、定着した村落形成と農業を実現する指導に取り組んでいるということでした。

レル君とラニーさんは自分達の村でその人たちに定着農業の技術移転とその拡大を目指しているようです。中でもラニーさんは昨年村のお母さんたちに日本で覚えた洋裁を教え始めていると言っていました。もっとも基礎的な部分の反応は得やすいが、次のステップアップが難しいと言っていました。

かねてから相談していたこの地からの次の研修生は漁業の分野でした。PHDとしては農業と同様エクステンションワーカー(いわば漁業改良普及員)から人づくりに協力するということになりました。私としては漁村を訪問して漁民をと考えていたのですが、現地調査の結果実現不可能でした。選考後メラネシア教会協議会のパット総幹事に今回の結果を報告し、9月26日帰国しました。

来年度の研修生(別掲)の来日が楽しみです。彼らの村の自立への応援のための働きはやめられない喜びです。

総主事 草地賢一



ルーク・スイファシア(22歳 男性)
ソロモン諸島国
研修内容 農業

アンナキナキで唯一高等教育を受けた青年。何故首都で働かないで村にいるのかと聞いたらピープル(民衆)が好きだと答えた。

両親を失くし兄達に育てられた。感情を抑え気味に話し、冷静な受け答えが印象的。



トゥントウン(22歳 男性)
ビルマ・マンダレー州
研修内容 農業

10期生ウィンさんの開いている村の私塾の生徒のひとり、11期生のトゥンティンのおとうと弟子。体は小柄だが敏捷な感じ。明るく笑顔の中にキラキラ光る眼が印象的。強い意志を持った青年と見受けられた。



ネア・スティープ・ノレウエ(26歳 男性)
パプアニューギニア
研修内容 漁業

3人の候補生の中から選ばれた。ルーテル教会農村開発部の漁業改良普及員。豊富な漁業資源を効果的に利用する漁業の全般的な運営を学びたいとのこと。時に底抜けの明るさを見せる快活な青年。



プリチャー・ムアンチャン(31歳 男性)
タイ・メーホンソン県
研修内容 産消提携

3期生として日本で1年間(1985.3-1986.3)農業を学んだプリチャーさんは、第2次研修として、5月より3ヶ月の再来日。地域で無農薬野菜の産消提携を始める為、日本でその方法や現状を学びます。

産消提携運動に関心

今年の日韓農民交流は「できるだけ多くの生産者宅を回りたい」という韓国側からの要請もあり、兵庫県下の6軒の農家を訪問しました。

メンバーが特に関心を持っていたものの一つに日本の産消提携運動があります。概して、韓国では有機農産物を販売するのに特別な方法があるわけではなく、一般の農産物と同様に市場を通しているのが現状です。安全な食べ物を得ると共に自然環境に適合した農業を実践するため生産者と消費者が手を結ぶ産消提携は、日本の有機農業を支えてきた大きな要因ですが、この実情を学ぶことによって「韓国でも何らかのかたちで消費者とのネットワークを構築したい」と団長の金さんは語ってくれました。

訪問先の農家では無農薬・有機栽培の農産物を求める消費者側からの要請によって有機農業を始めた所が多く、メンバ

ーたちは消費者の意識の高さに驚かされると同時に、韓国でも消費者への啓発を行っていかねばならない、と感じたようです。



有機・無農薬の農業を聞くメンバー(神戸市西区、浪谷さん宅)

また、訪問先では農作業を手伝いに来ている消費者の方々と出会う機会もありましたが、どの農家でも消費者との交流を大切にしていました。農業を使用しな

第四回 日韓農民交流

ければ除草や虫取りなど手間が掛かりますが、それを消費者が手助けをしています。このような生産者と消費者との協力関係を築くには、その農民が信頼を得ていなければならない、ということが交流の中で度々話されました。メンバーの人たちは、そのような農民に対して「有機農業に対する愛着、自信、矜持、そして農業を楽しく思う姿はとても印象的であった」と述べていますが、自分の農業に自信を持って取り組むことの大切さを再確認できたことは今回の交流の大きな成果の一つと言えるでしょう。

最後に、メンバーは訪問先で研修生と一緒にすることがありましたが、「東南アジアの開発途上国の志のある青年農民を招聘し、日本の農業を始めとする様々な研修を行うPHD運動の意義を理解し、これからも交流、協力を続けていきたい。」と語ってくれました。

各地で有意義な研修

リーダーシップ養成と社会問題学習を目的とした研修旅行。各地のボランティアの方々のご協力により有意義な研修を実施することができました。心より感謝申し上げます。

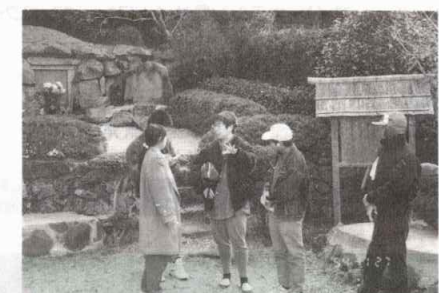
(東日本) 彦根YMCA~福井・三方第三小学校~岐阜・飛騨PHD友の会/中山中学/中濃教会~甲府教会~松戸教会/松戸聖パウロ教会~東京・シャプラニール/自動車総連/全本田労連~神奈川・全いずろ労連/まぶね教会/深沢中学~東京YMCA~逗子・池子の緑を守る会/鎌倉・山崎の谷戸を愛する会/藤沢教会~愛知・日本福祉大学

(西日本) 福岡・福吉伝道所~北九州・アジアを考える会/北九州YMCA/西

南女学院短大/祝町小学校/東郷教会/春日東教会/庄内町生活体験学校~大分・下郷農協~熊本・阿蘇百姓村/熊本YMCA/水俣病センター相思社~下関丸山教会~広島YMCA/広島牛田教会/あやめ幼稚園/桑本塾/広島県農業者大学校~PHD島根県支部~タイム(鳥取県国際交流連絡会)~岡山YMCA

計5週間にわたって数多くの交流でそれぞれが意見を発表していく中で、研修生のこれまで学んだことか次第に整理されていく様子がみえました。ソコムさんは「カンボジアの人は農業が友達、日本の人は会社が友達」と語り、アジアの土に生きる草の根の青年の日本での生活の印象がこの一言に集約されているようです。

東・西日本 研修旅行



乙女塚の前で水俣病の被害について聞く研修生(水俣市にて)

また、逗子における女性を中心とした住民自治運動に多く啓蒙され、民主主義の基本をそこに確認しました。そして各自の母国で聞いた水俣と広島の悲劇を目の当たりにして、二度と繰り返してはならないと深く心に刻み、各地の人々から色々なことを学ぶことができました。

アジアの風便り

セニフィタさん(10期、インドネシア、女性)

わたしはようちえん(幼稚園)で働きにはたります。そしてがそくもげんきです。ようちえんから、わたしにせれりー(サラリー=給料)をもらいました。めんばーもおおくなりました。インドネシアでわ、イスラムのひとがだんじきします。もすぐです。

シャーンタさん(10期、スリランカ、男性)

スリランカではいま、あめをすこしやみしました。まえばたいへんだったけれども、いますこしいとおもいます。わたしのおしごとたいへんです。いくらがんばってもいろいろもんだいがたくさんでいます。ゆつくりゆつくり、いまおしごとしています。ひよこ、まだちいさいも2けつ(2ヵ月?)です。たまごうおとり、すこしだけ、それからにくのためにいるとります。それからバナナもうえましたです。

帰国した研修生から届いた手紙の一部をご紹介します。(原文のまま)

例年なら募集する前から席が埋まっているような年末年始のタイツアーですが今回は不況のあおりか出足が不調。それでも新聞その他広報誌での募集で新しい参加者を得て、去年と同コースで研修生を訪ねる15人の珍道中が始まりました。

まずはチェンマイから車で3時間のポッケオの村。コマさん、トーさん、TKBCのサニーさんを交えて夜のミーティングでは、村の生活、農業のことを聞きました。その中でコマさんは、「日本で学んだことを村で伝えようとしているが、政府や市場環境などの状況が違うために使えるものと使えないものがある。少しずつやりましょうと今日日本にいる研修生に伝えて」と言っていました。

ここポッケオの農産物をチェンマイの消費者につなぐために、トーさんはマチとムラを行き来しており、セミナーの企画や大学内に店を出せるような交渉をしているとのこと。ポッケオでは今イチゴ、タロイモ、牛などのグループを作っています。

翌日、ムシキーの村に移動しました。ツア

'93.12.23~'94.1.2
15名参加

コース：大阪~チェンマイ~ポッケオ村~ムシキー村~(チェンマイ)~カラシン県サイナワン~バンコク~大阪

TKBC：タイ・カレン・バプテスト会議
研修生送り出し団体
PRDI：パヤップ大学農村開発研究所
研修生送り出し団体

トーさんの笑顔

昨年秋、兵庫県下で産消提携を学んだ際の通訳をした松永哲征さん(大阪府・学生)にトーさんの素顔に迫ってもらいました。

タイ人の気質かもしれませんが、トーさんの笑顔は実に多彩でした。研修先で馴れない日本食を食べて口に合わなかったときの苦笑い、久しぶりにタイ料理を食べた後の満足そうな笑い、林業体験合宿に参加した際、器用に枝打ちや間伐をして皆に誉められた時の照れ笑い。市島町で除草作業をしている際に「これが終わらんとご飯食べられへんよ」と言われ、前方に延々とあるうねをみて肩を落としながら私にみせた笑顔。早朝や晩遅くに仕分け作業や出荷作業をしている生産者の人々を見て、「あんなお年寄りなのによく働いてはるなあ、タイ人のお年寄りはこんなに働かないよ」と感心しながら笑顔を見せ、私が「あのおじさんなあ、若く見えるけど78歳なんや」と言うと、もうあきれられるような顔をして

第10回 タイフオローアップ スタディツアー報告

一に先立って布のグループの婦人たちと草木染をしたいというお願いをしており、午後からの短時間でしたが、実習をすることができました。実際の作業はかなりのものがあることを体験できました。夜のミーティングでは、日本からの参加者の「友達になりたいが、日本のことをどう思うか」という質問に対し、「何回も来る人はなぜか」と聞かれ、「カレンの人が好きですから」との答えに拍手。日本の若い人がカレンに来てくれませんかとのラブコールまであり、布のことも熱心な話ができました。

チェンマイでは、トーさんの働くPRDIを訪ね、ポッケオなど地域とのつながりや支援の方法を含め、その働きを聞きました。

ムシキーからの6人と、夜行バスでチェンマイからサイナワンまで15時間余りの大移動。村までのバスでは車掌さんと言葉がうまく通じないハプニングもありましたが、何とかイサーン(東北部)にたどり着きました。

不在で会えなかった研修生もいて残念でしたが、ワラヤさんには男の子ができて、研修指導者の田中さんなどはわがことのように喜びました。

サイナワン農民協会のバムルンさんの説明で、タイの国では企業、役人、銀行はうまく協力しているが、農民だけが外され、生活が

チャラムサック・カティヤ (トー)さん (タイ・1993.9.20~11.6)

笑っていました。大阪で私の友人達と一緒にお酒を飲んで大騒ぎをした時は、研修中にはなかった大笑いを見せてくれました。研修後半になり、帰国後の彼の活動方針や具体案が徐々に見えてきて、それを私に説明してくれる時などは意気軒昂としていて、私には体全体から生じる笑みとでも言うのでしょうか、そのようなものを感じました。

最後にトーさんの特別の笑顔を紹介しよう。これはやはり、結婚してわずか半年の奥さんの話をする時のトーさんの笑顔でしょう。この笑顔とうまく例えるのは難しいので、一番幸せそうな笑顔を思い浮かべてもらえればおそらく正解となるでしょう。帰国の日、トーさんが空港で見せてくれた笑顔の裏に奥さんの姿があったのを、私は見逃さなかったととも嫉妬してしまいました。

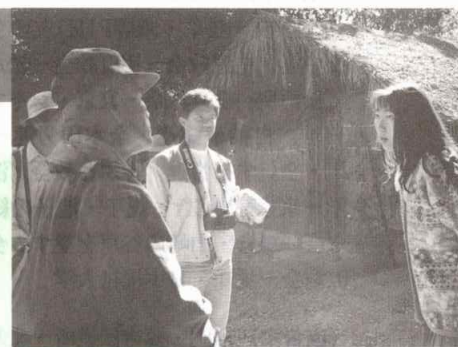
また、帰国後チェンマイから届いた彼からのレポートの一部をご紹介します。



苦しくされているということを知りました。ここではダム建設のために痩せた土地への移住を余儀なくされた農家が様々な問題を抱えていることを知り、またユーカリの林も見せてもらいました。夜には隣の県からも仲間がやって来て、話が始まりました。

カレンからの訪問者は、農業についてイサーンの村人と語り交流を深めていました。村の年末のお祭に加えてもらい、子供たちとは折り紙で交流し楽しいひとときをもちました。大晦日の日にカレンの人たちと別れ、夜行列車でバンコクへ。お正月にはしばしのマチを楽しんで2日に帰国しました。

以下参加者のレポート抜粋をお届けします。



キノコ類の栽培について説明するトーさん(チェンマイにて)

「研修では有機農法や生産者と消費者グループの組織作りを学ぶにあたり、正しい有機農法の始め方、市場と消費者の確保、生産者への協力方法、消費者が自覚を持って協力し生産者もそれに応えるような信頼関係を築くことなどについて実際に関係者との意見交換の機会を持つことができた。これらは有機農法を始める上で非常に重要なことである」

トーさんはポッケオの村人対象に有機農業セミナーを計画するなど意欲的で、今後の活動に期待したいところです。

イロリ端でカレンの人と片コトの言葉で交流するツアー参加者

実りある日本での研修 田中五郎 兵庫県淡賀町・農業・研修指導者

チャラムサックさんが昨年9月に来日して、日本の農家と消費者グループ双方の立場を見学し帰国して、チェンマイ市と研修生がいるタホタの中間地点で産消提携運動の一環として消費者組合作りの準備を実施しているのを知りました。どのような組合作りが進んでいるかを楽しみに日本を出発しました。

彼を通じて、タホタの村人の生活向上、村の農業の貧困と村の経済研究等を15余り項目別に研究が進められていることの説明を受けました。次回のタイツアーにはどのような消費者と生産者の組合ができていくか、またタホタの村の農村生活がどのように前進するか楽しみです。

タイ東北部では楽しみにしていたサウエーやサンコムと出会えなかったということに、改めて東北タイの厳しさと現実に触れた思いでした。

ただ、ワラヤが今年ポンプを購入し、少雨という天候不良を乗り切ったことを聞き、日本での研修が実りつつあることを感じる事が出来たことは、とても嬉しいことでした。

多いカレンの村からの学び 広岡正人 兵庫県福崎町・農業・研修指導者

日曜日の朝、山の村々から白いシモア(赤い糸で飾られた少女の服)に身を包み、山道を歩いて教会に集まる少女たちの姿に感動しました。日本で忘れつつある敬虔な姿を見て、私がまだまだ学ばねばならない多くのことがカレンの村にあると思わずにいらませんでした。

幸せって何? 堂本浩子 神戸市 学生

同じ時代に私たちと正反対のような生活をしている人がいることを知り、「幸せって何だろう」と考えさせられました。

もしチャンスがあれば村に住み、村に流れ込みはじめている文明一歩の土に還ることのないビニールの袋などについて一緒に考えてみたいと思います。

温かいもてなし 益野和恵 福岡県金田町 学生

村の人たちはとても温かく、私たちが大事



カレン(タイ北部)の人と国内交流するサイナワン(タイ東北部)の農民たち



なお客さんとしてもなしてくれた。

でももし、もう一度行く機会があれば少し長く泊めていただき、お客さんとしてではない生活を体験したいと思いました。そのためには、語学の勉強頑張るゾ。

多民族のすみ合える関係 北山敏和 和歌山県田辺市 教員

今世界では多くの民族が血を流し合い戦争をしています。21世紀は固有の文化を守りながら多民族が、どうすみ合おうか(Sharing)が大きな課題だと思います。

タイの村で、国と国がどういう関係になろうと、絶対に戦争などを起こさないような人と人との関係を作らなければと、強く感じました。

真の豊かさ... 上原真理 神戸市 幼稚園教諭

日本にいる私たちにとって必需品である電気、水道などがなくにもかかわらず堂々と優しく、たくましく、知恵をもって生活している村の人を見て、本当の豊かさとは何かを考えさせられます。

日本のアイデンティティは... 八木康孝 兵庫県姫路市 教員

溢れかえる物質の中で暮らしている我々と最低限度の調度品の中で暮らすカレンの人々を比べ、豊かな生活とは何か改めて考えさせられました。これから彼らも否応なしに新しい波の中に巻き込まれていくだろうけど、我々の物や資本だけでなく、道徳や哲学を持たなければならぬと深く感じさせられた旅でした。

アジアから謙虚に学ぼう 中西建司 神戸市 教員

このツアーに参加して、特に思ったことは自分の農業問題についての知識の乏しさだった。「国際化」が叫ばれている現在、ともすれば欧米に目を奪われがちだが、アジアにもっと目を向けアジアから謙虚に学び、日本人がどう国際社会の一員として生きていけばいいのかを考えるスタートとしてこの旅を位置づけたい。

バムルンさんの動きに関心を 呉麗莉 神戸市 学生

ムシキー村の冬空は、いっぱい星がキラキラ輝いていた。お月さまが手が届くほど近くのように見え、見守ってくれていた。そんな静けさの夜と出会って、あまりに感動しすぎて幸せだったと感じた。

ツアーへの参加で、現地の人々と出会って交流する中で、実は私自身の生き方を問われ、

様々のことを教えられ、学んできたことが多と思う。

特に、イサーンの農民リーダー、バムルンさんが、自ら先頭に立って自分の力で自立生活を目指していることに深く関心を持った。

日常性のある旅 田中俊甫 兵庫県豊岡市 教員

旅は、所詮、日常性から非日常性への希求の産物であると解釈している。そこで自分の旅の中に少しでも日常性のある要素を取り入れられ得るものとしての思いが、今回の参加の動機だった。このツアーで得るものは、何だったのか振り返ってみても、格別「これだ」というものはない。彼ら村人と3、4日生活を共にしたからといって、彼らの考えや悩みが理解できるわけでもなく、彼らの生活を知ったからといって、今更自分の生き方を変えるわけでもない。彼らにとって、自分は通りすがりの旅人に過ぎないわけである。

だが、村人があれだけ歓迎してくれたのは、私個人をでなく、PHDの運動の今までの実績の結果であることは理解できた。このことこそ尊いものだと痛感させられた。

『ターブルカレンの人々』の「交流、連帯を求めての旅」の中で述べられている「旅のもたらす結果が国際の日常化であり、生活化である」というのが、少し理解できるような旅だった。

アジアを通してみる私 蜂谷知子 神戸市 保母

ツアーで「アジアの貧困」を見てきたのではない。そう、タイの友達に会いにいった彼らの暮らしにふれてきたのだ。

私たちは、アジアというついでに「貧しさ」ばかりを取り上げてしまう。そして「あんなに貧しいのになんで人々は明るいのだろうか? カレンはすばらしい」と。

確かにカレンの村には電気はない。でも彼らはそこで生活しているからこそ、笑いも明るさもあるのだ。だからカレンで感じた明るさは日本の村と同じだと思った。私は、カレンの村にいながら日本の村にいるような感覚を覚えた。

日本にも様々な問題が山積みだ。アジアの村を通して日本の村に目を向ける。そして自分自身の生活を見つめ直すことがアジアにつながる初めの一歩なのだから...

何かが始まった旅 鈴木浩子 埼玉県春日部市 公務員

村の人々の電気も水道もない素朴な暮らし、皆で助け合っていく暖かい心に触れて、私たちが彼らから多くを学ぶべきだと痛感しました。自分が何を出来るのかはまだ良く分からないけど、これからはずっとこの国に関わっていきたい。私の中で何かが新しく始まった旅でした。

国際化のプラス、マイナス

職員海外研修
レポート3

昨年4月から海外修行は英国、インドを経て11月から南太平洋の島国フィジーに来ています。日付変更線のすぐ西に位置する300以上の島々から成り、全体で四国とほぼ同じ面積です。人口は約74万人。メラネシア、ポリネシアの混血とされるフィジー系と英植民地時代に砂糖キビ労働者として移ってきたインド系がほぼ同数、加えて少数のロトウマ系、中国系、欧州系等の人々などで構成されています。南太平洋の十字路と呼ばれ、この地域の政治、経済、交通、文化の中心地となっています。

私は首都スバにあるフィジー社会奉仕協議会を通してこの地のNGOによる活

動や、また農村、漁村を訪ねて、人々の生活から勉強させてもらってます。

恵まれた自然環境のもと、GNPでは計り知れないゆたかりとした生活(特にフィジー系の村にみられる共同体的生活)を学んでいるというのが全体の印象です。しかし表立ったり、全体的なものではありませんが、フィジー系とインド系住民の間にある対立や、西洋文化の急速な浸透、若者を中心とする都市への人口移動に伴う社会問題がみられます。また各地を訪ねていく中で、ここにとっての国際化は庶民にとって果してプラスに作用しているのか考えてしまいました。外を知ることによるプラスとマイナス。

アジアの村を訪ねたときにも思ってきたことですが、小さな島国での強い影響に深く考えてしまいます。

そしてここにも豪州、ニュージーランドを中心とする政府援助、UNDP、ユニセフ等の国連機関、海外NGOが入っています。日本も有力な支援国であり、青年海外協力隊員も30人以上います。これらの多くは支援元の資金、物資、先進技術を持ち込むことが中心になりますが、外から持込まれる開発、近代化、都市化、西洋化に伴う弊害を示し、伝統的な生活を評価し、是々非々で外からのものを取り入れる姿勢への協力がより大事ではないかと感じています。

*本研修は立正佼成会NGO人材育成支援計画のご支援をいただいています。

スバにて/主任主事 藤野達也

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1993年11月	74件	1,522,373円
12月	783件	6,253,001円
1994年1月	274件	2,495,777円
	1,131件	10,271,151円

不況の嵐が吹き荒れている中で、昨年末の会費、ご寄附への影響が懸念されていましたが、予想以上に落ち込んでいないのが現状です。とりわけ、会費の納入件数が減少しています。PHD運動は皆様の会費、ご寄附に支えられています。もし、1993年度の会費納入をお忘れの方があれば、よろしくお願ひいたします。

〈郵便振替口座変更のお知らせ〉

郵政省の「新処理システム」導入に伴い、1994年5月から、次のとおり変更になります。

当分の間は移行措置で、従来の番号でも通用しますがお確かめ下さい。

4月までの口座番号：神戸1-29688

5月からの口座番号：01110-6-29688

〈ホストファミリー募集〉

次期研修生の阪神間のホストファミリーを募集しています。ご希望の方、興味のある方、一度お問い合わせ下さい。

●12期生4名(男性3、女性1)4月下旬(予定)より1年間。来日直後2ヵ月間の日本語研修中は毎日、以降は研修の合間の帰神時(平均1ヵ月に5日)のお世話をお願いします。

●短期研修生(男性1、5月より約3ヵ月間)研修合間の帰神時(平均1ヵ月に5日)のお世話をお願いします。原則として朝食・夕食、宿泊をお願いします。当協会規定額を経費としてお支払いたします。

〇月×日のPHD協会

総主事 草地 今年度は東西研修旅行にほとんどフル出場。体がついていかんと言いつつ、話もお酒もたくさんこなす。

主任主事 藤野 今度は避寒と南太平洋の国々へ。初めてのフィジーに。昨年末にはボランティアが現地に行き、仕事ぶりを調査されビックリ。

主事補 小松 2月11日に長い長い春を終え、めでたくゴールイン!これからは汗かきかき、元町商店街の安売店を走りまわる姿が見られるかも…!?

主事補 吉岡 昨年の夏から研修先の丹南町で市民農園をボランティアと共同で借りたものの、なかなか作業に行けず。研修移動の際に研修生も一緒に草引き、種まき、そして天然のうま野菜を収穫。

主事補 渡辺 冬はホカホカカイロで暖をとる、夏は休日にも事務所に出てきて涼む清貧な生活を実践中。

事務所でもっと体を動かさないと…との声に「市民運動不足」と一言。さて、どう解消しましょうか?

囑託 柳下 念願かない今年から独り住居。引越に車を運転し、お手伝いのボランティアを恐怖のどん底につき落とす。

小松職員の結婚披露パーティに大挙して押しかけたボランティア一同。替え歌を歌い拍手喝采を浴びる。「さすがF主事の指導で芸達者」と他団体の出席者から高い評価を受ける。

編集後記



「大人ってどんな人のことだろう?」

大きい人と書いて「大人」体が大きいからか、心が大きいからか、考えが大きいからか、経験が大きいからか、自分は大きいだろうか? 成人式が来たら、大人になるのか? それは違うと思う。それじゃあいつまでも子供の人がいるだろうか? それも違う。

何事もはじめは小さいのです。そして大きくなろうと努力するのです。「PHD」も小さかったはずだ、それが今では、ぼくのような高校生までがその存在に気づき、事務所に出入りしている。

人もはじめは小さかった。少しずつ大きくなってきた。ある人に「何事も勉強だよ」と

教えられることがある。そう何をするにも勉強だ、知らず知らずに勉強している、そして今の自分がある、生きていることそれは勉強なんだ、何をしなくても何か考えている、何かすると新しいことに気づく、そしてぼくは新しいことに気づくためにこの事務所を訪ねた。

自分を振り返るのではなく、大きな自分に気づくために。

植村 知弘

読者の方から綴じ置きをする時に4~5Pの真ん中に穴があき、後で読みにくいと御指摘がありました。レイアウトの都合上やむを得ない時があります。御容赦下さい。

カキG

〈編集メンバー〉

飯塚節、上原真理、植村知弘、内田治子、得原輝美、柿原登志夫、川本恭代、児島章一、西松千夏、樋口雅一、藤木寿乃、山口剛史

新規会員・寄付者ご芳名は、 個人情報保護のため 掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。